

## マスターズを彩るレジェンドたち(4)

季節は盛夏の8月。今年は天候不順で地域によっては長雨で水害被害が大きく、加えて新型コロナウイルスの居座り。うっとうしい世のなかに元気をと、マスターズのレジェンドたちが力いっぱい走って、跳んで、投げて、となればいいのだが、各地のマスターズ陸上は中止が相次いだまま。一日も早い再開が望まれるが――。今月号もかつて輝いたレジェンドを紹介。

写真／BBM、鴻野政代さん提供

マスターズPR係を自認した  
料理研究家のスプリンター  
土井 勝さん(大阪)

土井勝さん(大阪)が病には勝てず1995年3月7日に亡くなって25年がたつ。74歳で天国に旅立たれた。生前は知人ぞ知る料理研究家で、テレビの料理番組や、講演会に引っ張りだこ。茶の間では絶大な人気があった。

そんな土井さんの、料理の世界を離れた趣味はといえば「陸上の短距離だよ」が口癖だった。「えっ？」と思われがちだが、土井さんは1941(昭和16)年に旧国立競技場であった戦後の国体に相当する第12回明治神宮大会の青年団100mに大阪代表として出場。11秒5で優勝しているスプリンターだったのだ。

「納得のタイムでなかったのは、物資不足の時代で青年団の部はスパイクを履けず、ハダシで走ったため」と話していた。香川県で1921(大正10)年に生まれ、小学校5年生のときに陸上になじんだ。その頃から足自慢だったのだ。土井さんが割烹学院に入学して、料理への道に入ったのが14歳のとき。16歳で初めてスパイクを履いた。1940(昭和15)年に開かれる予定だった東京五輪への出場を夢見たが、第二次世界大戦の勃発で中止になった。戦時中は海軍に入隊。時代は流れ、1981(昭和56)年秋にマスターズ陸上の存在を知った。

初の全日本マスターズは  
憧れの国立競技場で

土井さんはマスターズ連合の副会長

を務め、1982年10月2、3日に思い出の国立競技場で第3回全日本マスターズが開かれることを知ると、長い歳月を埋める練習を始めた。当初は「15秒台で走ればな」だったというが、14秒6のカムバックタイムを出せた。

61歳で全日本マスターズM60・100mのレースに出場。「年齢に関係なく、練習次第でいける」と語った土井さんは、料理学校を経営する多忙な身だったが、「陸上は生活習慣と一体だ」という。憧れだった国立競技場で走り、予選14秒04で1位通過を果たした。だが、張り切って走った決勝ではタイムが落ち、6位となった。

「その昔なら予選、準決勝、決勝と順を追ってタイムが上がっていったのに、そうはいかなかった」。しかし、レース後が大変だった。土井さんの出場を知った「女性ファン」が取り囲み、記念撮影が延々と続いた。

その後は、全日本マスターズの第4回長崎大会でM60・100m予選を14秒3、第5回沖縄大会で待望の13秒台(13秒9)、第6回徳島大会では64歳と不利な年齢だったが、13秒6をマークした。いずれも入賞には届かなかったが、日頃の努力の成果が表れた。

努力の一端を紹介すると、ビルの階段を上がるときには、時間があればエレベーターなどを使わず、カカトをつけずに、つま先立ちでさっさと足を運んだ。普通に歩くときにも足のつま先に力を入れた。「こうしたことを実行することで、快調にリズムカルに歩けるはず。ひいては走るときに役に立ちますから」と。



第3回全日本マスターズに出場した料理研究家の土井勝さん。当時の誌面には「ベストは戦前、戦後を通じて10秒8」「まるでタレント並みのすごい人気」との記述が

65歳となり、M65クラスで出場した第7回全日本マスターズでは、再度、思い出深い国立競技場で走り、14秒33とタイムは落ちたが4位に入り、4年ぶりに入賞した。

マスターズ連合の副会長としても精力的に動いた。1993(平成5)年に宮崎市を中心に開催した第10回世界マスターズの誘致に骨を折った一人でもある。他国で開かれた世界マスターズでは日本選手団の団長を務めた。

「マスターズ陸上は年齢に応じて5歳刻みでレースをする。だから高齢になっても(レースを)楽しめ、健康のためにいいスポーツだ。皆さん一緒に楽しみましょう。どうぞ、ご参加を」と

呼び掛け、PRを惜しまなかった。

料理研究家であり、マスターズ陸上の愛好者だった土井さんは、ヘラブリナ釣りの名人としても知られていた。『わたしの包丁ブレイク』といった著書やメディアを通じて“おふくろの味”という言葉を広く世に出した。

旬。土井さんは「旬とは旧暦を基準にして、出盛りで味の良い時節。おいしい物を食べると、栄養面だけでなく心まで満たしてくれる上、健康につながる」と説いていた。偉大だった料理研究家は二言目に「若い頃から陸上で鍛えていたことが、仕事（料理研究）の上でプラスになっている」と。

天国でもマスターズ陸上の夢を見られていることだろう。

## マスターズを楽しんだ 鴻野政代さん(徳島)

鴻野政代さん(徳島)の輝かしい戦績はマスターズ陸上だけではない。旧姓は坂田。戦前、旧制高等女学生時代を中国東北部(旧満州)の大連市で過ごした。鴻野さんは弥生高女で砲丸投をやり、1930(昭和5)年の第17回日本選手権では8m97を突き出して優勝している。

翌年の第18回大会では1位と3cm差の9m82で2位となったが、この記録は9m81を1cmだけ上回る日本新だった。2年後、弥生高女出となった鴻野さんは、1933(昭和8)年10月15日の日本選手権満州予選で10m50の日本新をマークした。しかし、同年の第20回日本選手権では3位に終わっている。

時代は流れ、坂田から鴻野姓になり、徳島県に住み、マスターズ陸上の第3回大会にエントリーした。大会は1982(昭和57)年10月に東京で開催され、鴻野さんは68歳だった。その頃は鴻野さんの年齢が、最高齢の存在だった。

結果的にW65では鴻野さんの一人舞台で、2.72kgの砲丸を7m90まで突き出した。それまでW65の記録はなく、鴻野さんの記録が認定日本記録



全日本マスターズの広島大会に出場した鴻野政代さん(中央列左端)。マスターズの仲間と記念撮影した一枚

となった。その後、W65クラスの日本記録を別表の通り、8m11(1984年)まで伸ばした。

全日本マスターズ第4回大会は不参加だが、次の第5回記念沖縄大会では、70歳となりW70クラスに出場。ここも競い合う相手はなく、独りでサークルに立ち、砲丸投8m09、円盤投14m38と新しいレコードを打ち立てた。W70クラスのベストは別表にあるように、72歳で砲丸投8m39、円盤投17m12。

第6回大会は“おらが里”の徳島・鳴門で開かれ、ここでも二冠を遂げた。鴻野さんは「楽しいからサークルに入っているだけです。まだまだ楽しみたい。ただ、『あなたはトシ』とは言われたくありません」とニコニコしながら話した。

楽しみながら全日本マスターズに出場した鴻野さんは第7～9回大会の両種目で1位の表彰台に上がった。砲丸の重量が変わった1989年の『国際・全日本マスターズ10周年記念和歌山大会』でW75クラスに出た75歳の鴻野さんは、ここでも一人で、砲丸投6m63、円盤投15m62の1位。

世界マスターズがベテランズといわれていた第7回大会(オーストラリア・メルボルン)、第8回大会(アメリカ・

ユージーン)、第10回大会(宮崎)にも参加した。W70で出場した第7回大会は砲丸投3位、円盤投4位。W75になった第8回大会では砲丸投は前回と同じ3位だったが、円盤投は16m20の日本新で2位につけた。

日本開催となった宮崎大会ではW75・砲丸投で6m61をマークしついにトップへ。円盤投は11m88で残念ながら6位だった。宮崎大会の1年後の1994年、第15回全日本マスターズ埼玉大会に80歳でW80クラスに出たときは、女子優秀選手の一人に選ばれた。

「マスターズに出るようになって随分たちますが、全国でたくさんお友だちができて。毎年、各大会でお会いするのが楽しみです。これもマスターズののおかげです」と鴻野さんの声は明るい。

### ●鴻野政代さんのクラス別日本記録

| クラス | 種目  | 記録    | 年齢・樹立年      |
|-----|-----|-------|-------------|
| W65 | 砲丸投 | 8m11  | (69歳・1984年) |
| W70 | 砲丸投 | 8m39  | (72歳・1987年) |
|     | 円盤投 | 17m12 | (72歳・1987年) |
| W75 | 砲丸投 | 6m96  | (75歳・1989年) |
|     | 円盤投 | 16m20 | (75歳・1989年) |
| W80 | 砲丸投 | 7m71※ | (81歳・1995年) |
|     | 円盤投 | 12m68 | (80歳・1994年) |

※は世界記録、砲丸投で砲丸の重さは1989年から3kg、それ以前は2.72kg